

## 批評と紹介

C・G・カーシーカル氏編「シユ

ラウタ祭全書」

辻直四郎

Śrautakośa. Encyclopaedia of Vedic sacrificial ritual comprising the two complementary sections, namely, the Sanskrit section and the English section. Sanskrit section [based on the Saṁhitās, the Brāhmaṇas, the Āraṇyakas and the Baudhāyanaśrautasūtra], vol. I: The seven Havis-sacrifices together with the relevant optional and expiatory rites and the Pitṛmedha, ed. by C. G. Kashikar, 38, 888 pp.; English section [based on the Śrautasūtras belonging to the various Vedic schools], vol. I, part I, transl. by R. N. Dandekar, 42, 537

pp.; Vadika Saṁśodhana Maṅḍala, Poona, 1958.

戦後驚異に値いする大出版が、インドの學者によつて完成され或いは計畫されて、梵文學を賑わしているが、本書もまたその一つであり、ウェータ祭式の研究者に今後長く多大の便益を提供するにちがいない。その企畫はすでに一九四五年に始まつたが、サーヤナ釋附キリゲ・ヴェータの出版完成（一九五一年）をまち、他の予定に先んじて推進されたものである。今その第一巻が出版されたのに際し、内容と價値との一端を紹介する。表題から判じて、利用者の範圍は限定されているように見えるが、英文部を通じて更に廣い讀者層をもつことを疑わないからである。當初の計畫はいちじるしく擴大されて、全四巻をもつて完成することになつたと聞く。（第四巻は語彙・圖解・索引等にあてられる予定。）しかも梵文部と英文部とは互いに補い、兩々相まつて「シユラウタ祭全書」の目的を達するように配慮されているから、完成のあかつきには、至便の参考書となることを期待し得る。

編纂主任カーシーカル博士の筆になる兩部の序文を讀めば分かることであるが、専門家以外の利用者のため、まず初步的なことを一言する。シユラウタ祭は三個の祭火を必要とす

る公式のヴェーダ祭式で、一個の祭火によつて行われる家族的グリフヤ祭と區別される。前者に必要なマントラ（讚歌・祭詞の類）、その執行に關する規定は、各種のヴェーダのサンヒター（本集）、ブラーフマナ（梵書）、アーラヌヤカ（森林書）の中に收められているが、特定の祭式を組織的に述べているのは、ヴェーダの補助文献の一つに數えられる祭式綱要書シユラウタ・スートラである。各ヴェーダは多數の學派に分かれ、その分派の極點はスートラにおいて見られ、同一のサンヒター或いはブラーフマナに依存しながら、細い點で差異を示す。いわゆるスートラ學派がこれである。従つて或る祭式がいかに實行されたかを知り、學派間の異同を明らかにするために、廣汎な文献にわたつて關係個所を検出し、且つその内容を比較研究しなければならぬ。しかしスートラ文献は、概してスートラ體と呼ばれる特殊の文體で書かれ、極端に簡潔を重んじた結果、これから直ちに脉絡ある知識を得ることは困難である。またその指定しているマントラ或いはその規則の根據をなす儀軌（*vidhi* 祭式規定）を、さらに古い文献中に探ることは容易でない。各種のヴェーダ文献の編纂法や記述の様式が、決して實用的目的に添つていないためであり、その苦心はこの種の研究に従事した者でなければ分からない。この勞苦を緩和し、時間の經濟を計るため、祭式

とに關係資料を一所に集め、即座に利用できるように配列したのが、本書の目的であり、特色である。

祭式研究の方法・目的は決して一樣ではない。まず第一に、祭式の過程・技術自體を正確に理解すること。これにはシユラウタ・スートラを中心とし、後の實用的文献（*prayoga, paddhati*）によつて補足し、現在に残る傳承を參考としなければならぬ。次に、サンヒター並びにブラーフマナとの關連において、祭式を歴史的に考察すること。この場合にはこれらの文献から祭式に關連の深い要素を抽出し、これとスートラの規則とを比較することが必要である。同一の資料はまた逆に、後者の規則の由つて來たる根據を、一層古い文献の中に求めるためにも利用される。次に、祭式に反映した文化的要素に重點を置き、古代インドの信仰・社會生活・慣習を探り、或いは他の民族のそれと比較すること。この場合、祭式の研究は廣い基盤に移され、しばしば國境を越えるが、この方向の研究もすでに成果をあげている。しかし祭式は、リグ・ヴェーダやアタルヴァ・ヴェーダの讚歌に比べて興味をひくことが少く、その資料となる文献は無味乾燥のきらいがあるため、研究も概して振わず、部分的には好著（特に Weber, Hillebrandt, Schwab, Caland, Dumont; なお最近には J. C. Heisterman: *The ancient Indian royal*

consecration, s-Gravenhage, 1957 が出た。)が現われているにもかかわらず、ヴェーダ學の他の分野ほど多くの専門家を輩出するに至らない。本書の出現はこの方面の研究促進のためにも歓迎すべきである。

梵文部第一巻は、七種のハヴィル・ヤジュニヤ(供物祭)即ち祭火設置祭(agnyadhēya)・日常朝夕の火祭(agnihotra)・新月・満月祭(darsapurnamasau, これに附随して祖靈祭 pīṅḍapitryājña, ヴァイムリダ・インドラ祭 vaimrīhēṣṭi)・初穂祭(āgrayaṇa)・三季節祭(caturmasyaṇi)・供獸祭(nirūḍha paśubandha)・サウトラーマニー祭(sautrāmaṇi)・これらに關連する種々の願望祭(kāmya iṣṭayāḥ)および贖罪法(prāyascittani)を収めたほか、葬送儀式(pitṛmedha)・パウダーヤナ派のシュラウタ・ストトラ(以下 Baudh. と略す)の一般規定(paribhāṣa)・祭場等の計測法(sulbasūtra)・祖先系譜(pravarasūtra)を載せ、正誤・補遺・索引をもつて終つてゐる。祭式ごとに大小の段落を分かち、それに使用されるマントラおよび祭式規定を含む章節を、各種のヴェーダ文献から抽出して掲げ、Baudh. の當該個所を添えている。黒ヤジュル・ヴェーダに屬するタイツテイリーヤ諸派の中、最も古く且つ最も重要なこのストトラは、類書と趣きを異にし、純然たるストトラ體によらず、むしろ連

絡ある散文體で書かれ、祭式の理解に最も便利であるからである。また Baudh. がその本文と分離させ、Dvaidhasūtra (= XX—XXIII) および Karmāntasūtra (= XXIV—XXVI) と呼ばれる部分を含み、パウダーヤナ自身・シャリーキ等諸學匠の見解の相違を伝え、或いは更に補足を加えていることは、その大きな特徴の一つである。本書がこの部分を分解し、角カッコ内に納めて、それぞれ關係する本文の次に挿入したことは感謝に値する。

次に英文部第一巻第一部は、梵文部の段落に呼應しつつ、後者に載せられた Baudh. の翻譯を根幹として、現存の全シュラウタ・ストトラ(必要に應じてはその他のストトラ文献)から關係個所を譯出し、比較對照の便宜を與えている。ただし分量の考慮から英文部は二部に分けられたため、今回刊行された第一部は、新月・満月祭までで終つてゐる。各祭式の冒頭には簡単な解説が施こされ、原典批判による是正等は脚注にゆずられてゐる。特に Baudh. の注釋書 Subodhini (cf. Preface to the Sansk. section p. 28, Preface to the Engl. section p. 13—14) の利用は注目に値する。英文部は Baudh. の全譯を目指しているから、本書の完成と共に、さらに一つの重要なシュラウタ・ストトラの英譯が追加され、Caland によるアーパスタンバの獨譯、シャーンカ

イヤナの英譯と並んで、ヴェーダ祭式研究の推進力となるばかりでなく、一般に古代インドの研究者或いは諸民族の宗教儀式の比較研究者にも貴重な資料を提供することとなる。梵文部の編著に深い専門知識と忍耐とが要求されたと同じく、英譯もまた専門の學殖の結實と言ひ得る。ダンデーカル教授の譯文は明瞭で要を得ている。梵文に親しまぬ人でも、一讀してヴェーダ祭式の概要を會得するに困難でない。Baudh.の行文は比較的平明ではあるが、術語その他に伴う困難は少くなく、この達意の譯文によつて啓發されるところは甚だ多い。ただし梵文部の全資料との交渉は、利用者の判断に委ねられ、注記も最少限度に節約されている。従つてこれと傾向を異にする Caland のアパスタンバの翻譯の價値は依然として高く、兩者の併用によつてのみ、タイッティリーヤ派の祭式の解明は、現在望み得る限度に達することとなる。

筆者はかつて供獸祭を例として、「ブラーフマナとシュラウタ・スートラとの關係」(東洋文庫、昭和二十七年)を論じ、散逸したカタ派のスートラの内容を、ある程度まで復元しようとした。供獸祭については、Schwab の好著(1886)があつたにもかかわらず、關係個所の檢索には多くの時間を費した。その際筆者はブラーフマナ散文中の儀軌的部分を「スートラ要素」と呼び、これを現存のスートラの規則と比

較した。着眼點に關する限り、本書がブラーフマナ散文から摘出している部分と筆者の「スートラ要素」とは、ほぼその軌を一にしている。當時本書が存在していたならば、多大の裨益を得たことを疑わない。しかし廣汎なブラーフマナ文獻から「スートラ要素」を摘出するとすれば、學者の見解によつて取捨の標準に相違を來たすことは避けられず、本書において省略された部分の中にも、捨てがたい要素の残つてゐることは止むを得ない。今後も専門家は各自の目的に従つて全文獻を涉獵すべきは言をまたないが、その場合においても本書がよき指針となることに變りはない。本書を細部にわたつて批判するには時間を要するし、供獸祭に關する部分の英譯が未刊の今日においては、筆者の論文と比較検討する便が與えられないので、ここには一般的に本書を紹介し推薦するにとどめた。

いかなる書物も完全ではあり得ない。編著者および英譯者の功績を十分に認めつつも、望蜀の感想をただ一つだけ附加したい。英譯はもちろん梵文部の段落の順を追い、後者において角カッコに納めて挿入された Dvaiddhas、および Kar mantas、(上記參照)の文句もまた同様の體裁のもとに譯出されている。梵文・英文兩部とも、その利用した Baudh. の摘出個所を、大段落の始めに一括して擧げているから、一應不

便がないように見えるが、専門家が個々の摘出文の原典における位置を確かめようとするときは決して簡単にない。今一例として冒頭の祭火設置祭の第一段落 (adhānopakalpanam) をとれば、利用された箇所は 2. 12; 1; 3; 4; 2; 6—7; 13—14; 20. 16; 24. 12—16; 14. 22 と指定されている。この段落は十節に細分されているから、その順序に従つて Baudh. (ed. Caland) における實際の位置 (巻数は省略) を挙げれば次のようになる。I. II. 12 : p. 53. 3—11, [XX. 16 : p. 33. 8—11], [XXIV. 14 : p. 198. 7—14], [XIV. 22 : p. 190. 10], [XX. 16 : p. 33. 12—p. 34. 5]; 2. II. 12 : p. 53. 13—p. 54. 4, [XXIV. 16—17 : p. 200. 3—p. 201. 2]; ……7. II. 13 : p. 54. 14—16, [XX. 16 : p. 34. 6—8], [II. 7 : p. 44. 1—5], II. 13 : p. 54. 16—p. 55. 13, [XX. 16 : p. 34. 9—10], II. 13 : p. 55. 13—14; ……このように摘出箇所を明示することは、確かに紙數節約の方針に反するであろう。しかし今後長く専門家の座右に備えられる参考書としては、梵文部或いは英文部の一方に、何らかの方法で摘出文の典據を明確にすることが要望される。

ともあれ、ソーマ祭を含む梵文部、ハヴィス祭の後半以下を含む英文部の刊行が、順調に進行して予定通り早期に完成することを切に希望する。

(東京大學教授)

## 敦煌關係近刊數種

池田 溫

甘肅省の輿地にある敦煌千佛洞の名が世人の注目を浴びてからすでに五十年を経過した。第四世紀半ばに開鑿され、以後十二・三世紀の西夏元代に至るまで、規模の大小はあれ新增乃至改装され續けた一大石窟寺院は、建築・壁畫・塑像等を含む造形藝術、及びその起動力となつた佛教信仰の輝かしい文化遺産としての人類の誇り得るもの一つである。更に石窟中の一洞から<sup>(1)</sup>、凡そ第五〜十世紀間に作製された約二萬點をこえる古文獻が発見され、その研究は佛教史をはじめシナ學、チベット學、また中央アジアの言語・歴史の解明に大きな光明を齎した。中國や日本の學界では、"敦煌學"なる名稱すら生れ多數の研究者の關心をひきつけてきた。しかしふりかえつてみると第二次世界大戰の前と後とでは、その研究のあり方に重要な變化發展が認められる。その第一は敦煌の地に研究所が設立され、研究員が常駐して遺跡の保存・研究に當るようになったことである。大戰中重慶の國民政府の下で西北地方への關心が昂まつた結果、一九四二年には中央研